学習意欲を高める古典教育
ー古典教育(明日香の旅)の場合ー

江口修司・金尾茂樹・金子直樹・金本宣保
世良馨子・竹盛浩二・信木伸一・藤原敏夫

2001年3月21日・22日に実施した国語科行事である古典旅行—明日香の旅—の報告である。教室で学んだ「万葉集」を、その歌のよまれた現地に自ら立って、万葉人の心に近づき、より深く味わおうというねらいをもって実施した。生徒自身が、それぞれ課題をもって現地にのぞみ、自分の課題に対する答えを出すという学習である。

1．はじめに

教室で学んだ古典を、その現地に出かけ、自分で歩いてより深く味わおうというねらいで、1979年以来古典旅行を実施してきた。今回も「万葉集」をとりあげ、目的地として奈良県の明日香村を選んだ。歌のよまれた地に立つことは、その作品の生命のエネルギーにふれること、万葉人の心に近づくことを可能にする。また、日ごろ、古典を遠い存在ととらえている生徒に、作品を身近なものとして感じさせることができ、学習意欲を高めることにもつながると考える。

2．古典旅行の概要

① 期　　日　2001年3月21日・22日
② 目 的 地　奈良県高市郡明日香村
③ 参加生徒　高校1年生希望者　31名
（男子5名、女子26名）
④ 行　　程

3月21日(火)	
福山駅発（ＪＲ）	8：56
京都駅発（近鉄）	10：32
橿原神宮前駅着	11：34
レンタサイクルで移動 甘橿丘——飛鳥川——藤原宮跡—— ——伝磐余池——香具山山頂	
宿舎着	17：00
学習会	20：00～21：00
就寝	22：30

3月22日(木)	
宿舎発	8：30
レンタサイクルで移動 飛鳥浄御原宮跡——飛鳥寺—— ——藤原夫人墓——伝飛鳥板蓋宮跡—— ——石舞台——橘寺——川原寺	
橿原神宮前駅発（近鉄）	13：55
京都駅発（ＪＲ）	15：47
福山駅着	17：20

3．事前学習

事前学習会は、教師が、飛鳥に関係する歌を「万葉集」から選定し、生徒がグループで数首ずつを分担して学習し、その成果をプリントにして発表する形ですすめた。生徒に、最も関心のある歌を一首ずつ選ばせ、現地でどう感じるか、その変化を確かめるという課題をもたせた。

学習した歌は次の通りである。（数字は「万葉集」の歌番号である。）

・甘橿丘……51
・雷丘……235
・二上山、伝磐余池……105、106、107、108、109、110、163、164、165、166、416
・大和三山……2、13、14、28、1812
・軽……207、208、209
・豊浦寺……1557
・飛鳥川……1380、3266、3267
・藤原宮跡……52、53

・飛鳥浄御原宮跡……324、325、4260、4261
・小原……103、104
・真神の原……1636、3268、3269
・橘寺……3822、3823
・川原寺……3849、3850

4．現地学習・事後学習

現地では、それぞれの歌を、全員で声をそろえてよみ、担当したグループが説明し、教師がそれを補った。

第一日目については、宿舎での夜の学習会で、第二日については、帰宅してから、それぞれの見学した中から、印象に残ったこと・各自の課題について、700字から800字程度で学習したことをまとめた。

生徒の作文から

第一日目

明日香の地

● 実に濃い一日でした。飛鳥についたときは、ＮＨＫの連ドラの「明日香」のことばかり考えて、

「おかめ饅頭っ、おかめ饅頭っ！フルーツ羽二重〜〜〜〜〜〜！」

とばかり叫んでいたけれど、のどかな風景に囲まれて、チャリチャリ自転車をこいだり、ズンズン山を登っていって万葉の風に吹かれていると、隣にはいっしょに古代人も自転車をこいでいるみたいに身近に感じる「故郷」とか「自然」とかいう、迫力に押されました。

目を開けても閉じても、華やかな、また、もしくはせつない幻が見えました。人が行き交う藤原京が見えた時、「衣干したり天の香具山」を、歌と同じアングルで見ていると実感した時は、鳥肌がたちました。

なかでも甘橿丘に登った時は、感動はひとしおでした。三山は、もっと遠くにあると思っていたのに、全然近くで、

「香具山は　畝傍雄雄しと　……」の歌を音読しながら、「畝傍雄雄し！」と思った。角度によっていろいろな顔を見せる山だけれど、近い・大きい雰囲気は雄だし、少し遠くでひかえめな耳成山は雌だったように思います。福山にいる時は、ハッキリ言って自然に男・女の区別をつけたがる古代人はナンセンスだと思っていたけれど、当時、毎日の生活が自然の気まぐれひとつで左右されたり、すぐそこに自然がある生活をしていれば、自然を擬人化したくなる気持ちがつかめたし、味わうこともできました。

本当に近い。この自然観をわかることができたのが一番の収穫です。たいへんうれしい。明日も、そろそろ愛着のわいたチャリに乗って収穫を得たい。

（文例Ａ）

● この明日香を訪れてみると、ここは時間がゆったりと流れていた。かつての繁栄がうそのように思えるくらいである。

甘橿丘から眺めた大和の地は、今では繁栄の影しか残っていない。その影を千年以上も見つめてきた大和三山や飛鳥川は、昔と変わらない姿であったはず。その姿を見ていると、

明日香川　川淀去らず　立つ霧の
　　思ひ過ぐべき　恋にあらなくに

と、古都を懐かしみ、愛していた万葉人の気持ちがわかってくる。それは、彼らがいかにこの地の自然を愛していたかということである。この美しい自然に囲まれ、彼らは何を思ったのだろうか。自分は彼らの気持ちになりきることはできない。しかし、彼らが、ここを永遠の地のように感じていたことはまちがいないだろう。

では、なぜ彼らは都を捨ててしまったのだろうか。時代が移り、権力者が移り、考え方も変わっていた。たしかにそうだろう。今までの歴史的事実から見ても、原因はそれらにあろう。

藤原宮跡で、自分はある光景を見た。それは、かつて天皇が住んでいた大極殿跡や都のだだっ広い跡地に、現在の人々が集い、仲間とともに楽しんでいるというものだ。なにげない風景のようだが、自分には非常に感動をおぼえるものであった。そこはかつての都であり、たくさんの人々が住み、往き来し、活気にあふれていた場所である。そこへまた、人々が集い、楽しみ、活気であふれさせているではないか。

ここで、前に書いたことを訂正しなくてはならないだろう。彼らは都を捨てたのではなく、都を永遠のものにするために去っていたのだ。その都は一度は滅びたとしても、またいつか復活する時を待っていたのでないだろうか。そのために、万葉人は、「藤原宮の御井の歌」を残したにちがいない。

この大和・飛鳥の地は、日本の永遠の都である。この地が、最も心安らぐ場所であることはいうまでもない。しかし、この都には、忘れかけた自然への思い、そして、自然の中に人がいるという発想がある。今のわたしたちにはこういったものが必要なのではないだろうか。

（文例Ｂ）

● 春だ。

遠い山の稜線はやや霞みがちで、それがたぶん、私にそう思わせた原因であろう。地面から立つ陽光の照り返しが、山の輪郭線を鈍らせ、サイクリングの背中に、軽く汗を浮き出させる。それだけのことが、前日の休みを、ただ惰性で過ごした私に、明日香に来てよかったと思わせるに十分であった。予想したとおりに、ほの白い彼岸桜の開花がそこかしこに見られ、万葉の歌碑がさりげなく道端に設けられている。

……省略……

香具山山頂からの帰り、汗もひいて快活になった気分とともに、夕刻の明日香の静けさと、蕭々とした気分に、爽快感を感じていた。万葉の地には、福山とも尾道とも同一の気配があふれていた。「風情があるね」と、私は友人のひとりにそう言った。私がその時感じた風情といったものは、最初甘橿丘で感じようとしたものとはやや異なり、明日香の空気や、その空気が持つ特有の色にあった。街が発展し、沼や田がなくなったにしろ、万葉人が詞に詠みこんだ風情といったものは、けっして自然物本来そのものにはなく、私たちが自然物を神聖だと感じ、美しいと感じることのすばらしさの中にあったかもしれない。そう感じた時、私は再び二上山のほうを見上げてみた。そこには、夕焼けの中、昼の春霞の中にはなかった、凛とした二上山の姿があった。

私には、昔の人々の心情を理解できるだけの学があるとは思えない。だが少なくともその時の私には、ありし日、その土地に住んでいたであろう万葉人の心と同化することができたのかもしれない、と思う。そう思ってようやく私には明日香のこぶりな風景の数々に、親しみ深い、ある種の感動をおぼえたのであった。

（文例C）

● 僕は、この明日香の地にかなりはっきりしたイメージを持っていた。今回、直接、京の歌を詠まなかったので、主に、田園、畦道、清流、そういったイメージであった。そして実際来て見ると、だいたいその通りだった。

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子
荒たへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて
埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば
青香具山は　日の経の　大き御門に……

の歌を好ましく思ったのは、前半の天皇へのおもねりを除けば、明日香の自然が作者の素直な感動とともに表されていると思ったからである。

しかし、何か違和感を感じた。たしかに、香具山は東に、畝傍は西に、耳成は北にあり、香具山と畝傍の形の変化と耳成の整った姿の対比はおもしろい。それでも、万葉の中のような神秘的な印象は受けなかった。その美しさ、穏やかさは、箱庭のようだった。思うにその理由は、危険がないことだと思う。

というのは、昔は山だけにかぎらず自然そのものを恐れていた。そしてそれが畏怖となり、上手に自然と付き合えるよう、神格化していったのだろう。山へ入れば整備された道もなく、大神が出没し、大雨や神鳴りは作物を駄目にする。昔の人々は自然を畏れながら、上手くおりあっていこうとしていた。しかし、今は違う。「もののけ姫」ではないが、神はもう死んだのである。森は開かれ、道は整備され、大和三山など、ちょうどよい遠足コースである。明日香川など、観光客にとって、しばしば失望の対象とされる。ハイキングコースに神秘的な印象を受けられるはずはないのである。つまり大和人が感じたようには感じられない。

今、読んでいる本の中で筆者はこう言った。「人々は自然を収穫している。」彼は、最も原始的な農業は焼畑農業であり、焼いた所は十年たたないと再生しないと言う。つまり、農業を始めた頃にはすでに神は消えたということだろうか。それもひとつの考えである。はたして、自然に畏れを抱くことをやめたのはいつのことだったのだろうか。これが今日の感想および疑問である。

（文例D）

大和三山

● 甘橿丘から大和三山を見渡した。畝傍の山はがっしりして男山の感じ。香具山は平坦で、少し雑然とした印象を受けたが女山の雰囲気。耳成山は形が整っていてつつましい女山の感じがした。私達にとってみれば、そこに小さな山があるというだけですんでしまい、足元ばかり見て生活してしまいそうな気がする。でも飛鳥の人々はこの山たちをみては季節の移ろいを感じ、感動や願いを歌に詠みこんだ。その気持ちの優雅さというか、自然に親しむ――というより自然とともにあろうとする態度？　そういう心が当時の人々にはあったのだなあと思う。都での生活と人々の心と自然とは、一体だったのだろう。

とくに藤原京跡に立つと、大和三山の三角形のちょうど中心にあるように見え、なんとなく神秘的な心持ちになった。吹き抜ける風がやわらかく、どこかけだるい感じがするのは昔も同じだったのだろうか。どんな建物のどんな都だったのだろう――目を閉じると千年以上昔の人がこの美しい都の永遠を願った気持ちが分かる気がした。と同時に、同じ場所に千年以上も

昔、天皇が立っていたと思うとめくるめく時の流れにのみこまれそうであった。

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子……
大和の　青香具山は……畝傍の　この瑞山は……
耳梨の　青菅山は……

とあるように、季節によってはこのうえなく美しく「とりよろふ」山々はほんとうにすばらしく荘厳な存在だったのだろう。自然を畏れ敬うというよりは自分たちを見守る父や母のように、飛鳥の人々は自然と接していたのだろうと思う。　（文例E）

飛鳥川

● 今日、訪れたところで最も印象に残っているところ、それは飛鳥川です。この旅行の前に行った事前学習会の時からずっと一番見てみたいところだったのでなおさらです。自分の最も気にいった歌に、

明日香川　瀬々に玉藻は　生ひたれど
　　しがらみあれば　なびきあへなくに

を私はあげていました。とてもきれいな歌であり、とてもつらい歌。そして、つらいのだけど、それでも自分たちの思い合いの強さをものすごく詠みこんでいる歌だと思っていました。そこで想像していたのが、大きくて、川幅の広い、水が豊かに流れるきれいな川でした。

そんな思いを胸に見た飛鳥川は、正直なところ、少し期待はずれなものでした。思ったより川幅も全く狭く、水量もそれほどない……。けれど、水のきれいなところ（魚があんなにたくさん泳いでいるとは思いませんでした）を見ているうちに、「明日香川　瀬々に玉藻は……」の歌が頭の中に映像となってあらわれて来ました。昔はもう少し広かっただろうその川で、ひとりで詠まれたその歌。その澄んだ川の中に、恋人の顔を見い出して詠んだだろうその歌。そんなことが、現在の飛鳥川を眺める私の目にうかんできました。川のきれいさ、澄みきったところと、ふたりの間にある黒くにごった障害物との対比も、ふたりの間にあるしがらみの大きさをものがたっていると思います。当時の全ての階級の人々から託された、さまざまな思いをのせて流れる飛鳥川。その思いは今、たった三十文字程度ではあるけれど、確実に、私達の心に届いているのだと、今日あらためて感じました。そんな人々の思いに触れることができ、ほんとうによかったと思います。　（文例F）

藤原宮跡

● 私は、藤原宮跡に行った時、なんだか本当に幸せな気持ちになった気がする。今日は天気もよく暖かくて、空も薄く雲のかかったきれいな水色でとても高そうで、今の私の気持ちと昔この地にいた飛鳥人・万葉びとたちが融合したような気がした。あんなにも何にもなく平らで広い場所に居られたのも久しぶりだった。私達はとても自由で、薄くて白い空の中を風がかき回すように、私はいろんなことを思った。藤原宮跡から見た大和三山は、甘橿丘から見るよりもずっと趣があって、藤原宮の御井の歌の、

……大和の　青香具山は　日の経の　大き御門に
春山と　しみさび立てり　畝傍の　この瑞山は
日の緯の　大き御門に　瑞山と　山さびいます
耳梨の　青菅山は　背面の　大き御門に　……
……常にあらめ　御井の清水

というのを想像することができた。本当に藤原宮は恵まれた場所にあったと思う。

磐余池に向かう時に自転車から見た光の具合（オレンジ）や、広い田んぼや、現在住んでいる人の家が、今も昔もこの地に人々が住んでいることが、それだけで尊いと思う。それは岡山でも広島でも同じで、それぞれの時代のいろいろな人々が暮らして積み重ねる薄い膜が、歴史になるんだと思った。とにかくあの藤原宮跡のだだっぴろい場所には、エネルギーが蓄積していて、それはきっと明日香村全部の土地においても同じで、磐余池の大津皇子の気持ちも、大来皇女の哀しい心情も全てが集約されて、あの辺り一帯の空の高い高いところに今も残っているような感じだ。ずっとずっと昔から貴族も庶民もみんなが暮らし、同じように空の下で生きている。今回この旅行に参加しているみんなも、それぞれに複雑にからんだ感情を抱えて今日の空の下にいた。そういう積み重ねが、とても尊いことだと思う。　（文例G）

伝磐余池

● 大津皇子が望んだ最後の景色という磐余池。説明を聞いた段階では、「そんな不確かな所へ行って……」と思っていたけれど、最も感銘を受けてしまった。ただ少し疲れを感じはじめた頃、直前に広大な藤原宮跡を見て、「ああ、ここで天皇が生きていたんだな。」とふと思った頃に、あの汚い池。工事の音は響くわ、水は淀んでいるわで、驚いた。鴨を探す気にもなれない。そもそも鳥もこんな所へ降りたくないだろう。さすがにみんな記念撮影もせんな……。

先生の説明を聞いて二上山を見た。あそこに葬られ

ていることを思い出した時、ふと自転車をおいた方の土手を見ると、大津皇子がイメージできた。かの時代の服を着て、悲しげに、寂しげに、けれどそこはかとない力強さと同時に途方にくれた顔をしている男性が、首を少し傾けて川を見ていた。それは今までに私が歴史の教科書や古典を習って想像したことのあるどの人達とも違った。彼らはきまってすかした顔をしているからだ。そんな大津皇子が見えると磐余池は滔々と水をたたえ、なるほど確かに鴨が浮いていてもおかしくない。蓮さえ見えてくるようだ。

ももづたふ　磐余の池に　鳴く鴨を
今日のみ見てや　雲隠りなむ

死にゆく自分を「雲隠りなむ」と自ら詠う人はどんなに辛いことだろうか。ただ、あえてこう歌にしたところにこそ、私の思った彼の強さがあるのかもしれない。正しいことをしようとしただけなのに殺されるはめになって、凡人ならやけをおこし、恨みをただだらだらと綴った長恨歌となっただろう。鴨に石を投げつけるに違いない。人はこうでありたいというのを最期まで見せつけてくれる人である。

大津皇子が見えた時に涙が出てきた。不思議な人だ。
（文例H）

● 大津皇子の歌は、どれもとても静かだ。音がない。瞳をとじて心をとじて、じっくりとやさしくつくった歌だ。明日香の宮で耳をすましている。ごはんを食べて、着物をきて、涙をふいて、袖をふって、死に臨んで彼の心はきっととても静かだっただろう。明日香の都は明るかっただろう。やさしい光と、やさしい音と、そして人々の心は彼にとっては荒ら荒らしすぎたのかもしれない。

時がゆっくり流れる。私は磐余池から見た二上山の様子が忘れられない。オレンジで、白く、遠くて近い。大来皇女の気持ちがしぜんに理解できる。ばからしかったかもしれない。雄大すぎて、騒がしすぎて、切なすぎて。私にはわからない。今を生きる私と、千年以上前を生きた彼女と彼とは全く違うけれど、何か、あの池に、山に、空気の色に遺していったように思う。二上山のあの夕刻。私はきっと忘れない。大来皇女も忘れはしないだろう。弟と呼んだ山、お別れの山。

神風の　伊勢の国にも　あらましを
なにしか来けむ　君もあらなくに

なみなみと青水をたたえる磐余池で、死に向かう大津皇子の、ほおの色も、空の黄色も、緑の鮮やかさまでも思い描ける。
（文例I）

第二日目……古典旅行を終えて……

大原の里

● 我が里に　大雪降れり　大原の
古りにし里に　降らまくは後
我が岡の　おかみに言ひて　降らしめし
雪のくだけし　そこに散りけむ

このふたつの歌は、はじめて聞いた時、歌の作者、つまり天武天皇と藤原夫人は、距離的にものすごく離れたところにいて、しかも藤原夫人のほうが高位にあるような、そんなイメージを持ちました。

それが、いざ現地へ行ってみると、実際の所は私のイメージしたものからは大きくかけ離れたものでした。このふたりの距離は、私達が自転車で行き来できる距離であったのです。これにはほんとうに驚きました。いくらなんでもこの距離なら、確実に雪は同時頃降るだろうと。しかも天武天皇のおかしな歌にたいして、藤原夫人もあんな返歌をおくるなんて……。ここでようやく、事前学習の時に説明された、「あそび心と親しみがたっぷりこもったもの」ということの意味がわかりました。にしても、天武天皇はよっぽど雪が降ったことがうれしかったのでしょうか？　でないと、わざわざこんな歌をおくったりしないでしょう。そして藤原夫人、そこはやはり機知に富んだ人というべきでしょうか？　いずれにせよ、ふたりの間には親密な関係が築かれていたであろうと考えることが、この場合しぜんでしょう。

このようなユーモアに富んだ歌のやりとりに触れると、今の時代を生きている自分と、けっして出会うことのない万葉人との距離をものすごく近いものに感じます。今までに自分は、多くの歌を読み、理解しようとしてきました。けれど今回の古典旅行を通して、教室で読む歌と実際に現地で読む歌の感じの違いを強く意識しました。肌で歌を感じた、そんな気のする古典旅行でした。
（文例J）

真神の原・橘寺

● 古典旅行に行ってよかった。今の時代であれだけ時間をかけて（しかも現地で）昔の人々の思いを味わうことは、そう簡単にできることではないだろう。昔の人々の詠みこんだ自然（多少は異なるけれども）から今に通じるものを感じることができ、いい経験となった。

大口の　真神の原に　降る雪は
いたくなふりそ　家もあらなくに

の歌。この歌の詠まれた地は、とても印象的だ。ひょ

っとしたら今と昔とのギャップがいちばんあるところなのかもしれない。それでも想像に難くなかった。あれだけの広めの土地に雪が激しく降り、人もいないし、家もない。おまけに狼への恐怖。歌はいたって単純で、きっとそのまま詠んだのだろうけど、かえってそれがリアルだ。今は田んぼがあって一見のどかな風景であるけれど、この歌を知って見た風景はそのだだっぴろさがかえってゾッとさせるような気がした。

それから最後に行った橘寺。あそこにはさまざまな建造物があって興味深かった。自分達の班が担当したところだったのでよけい心惹かれた。事前学習の時に見た写真では、こじんまりとした印象だったが、実際は思っていたよりも大きく、美しかった。境内に入って見たのもよかったけれど、川原寺の方から見た姿はなおいっそうよかった。

橘の　寺の長屋に　我が率寝し
　　童女放りは　髪上げつらむか
橘の　照れる長屋に　我が率寝し
　　童女放りに　髪上げつらむか

の歌は、調べた当時は少々生々しい感じがしていやだったのだけれど、外壁の白く、落ち着きはらった寺のようすを見ると、それもひとつの物語の一コマであるような気がしてならなかった。訪れたのはちょうど昼ごろだったけれど、夕暮れ時はもっと雰囲気があるだろうなあと思った。またの機会があれば行ってみたいと思った。

授業で習う時に想像する場面は、現地に行くとやはり違う。学校での学習で、違和感を感じた箇所も現地を訪れて納得できた所が多い。「どうしてこんな普通のことを歌にするのだろう。」と思うことはよくあるが、その謎も解けた気がする。小さな明日香川に恋心を詠みこんだり、山を擬人化したり、ユーモアを含めたり、時には恐ろしかったり。当時の人々の繊細な思いに少しでも触れることができたと思うのでとても満足している。　（文例K）

古典旅行を通して

● 一日目の一番最初に甘橿丘に登って飛鳥の地を見たとき、大和三山の近さと小ささに驚いた、その衝撃は忘れられない。

もっと遠くの方でかすかに見えるような山だと思っていたのに、目の前にポコポコとび出たみたいに並んでいた。どこに行っても必ずポコポコ出ていて、上から人を視ているようで、包まれてもいるようで、自然の二面性を実感。

山に囲まれた小さな都市が、日本の全てと言っても過言ではないところだった。丘に家を建てれば都市を一望でき、それが権力を表す。単純だけれど粗略にできない古代の感覚。現代に生きる私たちにしてみれば、その跡地も展示品も、未発達なものだけれど、ここに人が立っていて触れて使って、想像すればするだけ、言葉に表しにくい感動があった。また、逆に藤原宮には八階建て相当の建造物が、タイムリーな報道によれば飛鳥京庭園には、「壮大な池、『渡り堤』」（22日・朝日新聞）があったという。

私は専門家ではないので、なぜ跡地をみてそんなものがあったかを推定できるのか不思議なのだが、当時の技術を駆使して古代の最先端を行く者と、現代の技術を駆使して古代を探究する者のかけひきみたいな、想像して感動して終わりではない活動にも感慨深いものがある。今と比べものにならないほど、「閉じた社会」の、そこだけが異世界のような地をのぞき込めてうれしかった。

最後に、このように私が感動したのは、出てきた歌全てを通してそう感じたからなのだが、行く前に「気に入った歌」として、ピックアップした歌について思ったことを。

明日香川　瀬々に玉藻は　生ひたれど
　　しがらみあれば　なびきあへなくに

私はこの歌の意味よりも、読んだ時にすんなりと恋歌に受けとれる古代と現代の共通した心をうれしく思った。

比喩を比喩に思わせない素直な気持ちを託したくなる川とはどのようだろうとみてみると、案外小さく、生活に密着した川で、このような人のそばにいる川だからこそ、素直な歌がよめるのだと妙に感心させられた。澄んで透明なきれいな水で、魚も泳いでいた。

私は水の近くに住んだことがないから、一種のあこがれを抱いていたのだが、古代から現代まで、自然を愛するからこそ美しい川を残せるのだと、私は上っ面のみの“自然・古代を愛する者”なのではないか、私は川を美しく使う努力など考えていただろうかと、自分に問いかけた。

こういう面も含めて共通する心を映す歌には多くを学ばされる。それは失ってはならない部分だと思う。実に濃い二日間であった。　（文例L）

5．おわりに

生徒の書いた文章の一部を紹介したが、出かける前の学習で歌に対して抱いていたイメージが、現地では大きくゆすぶられていることがうかがえる。全体としては、「万葉集」を身近に感じ、万葉人の心に触れたような気がし

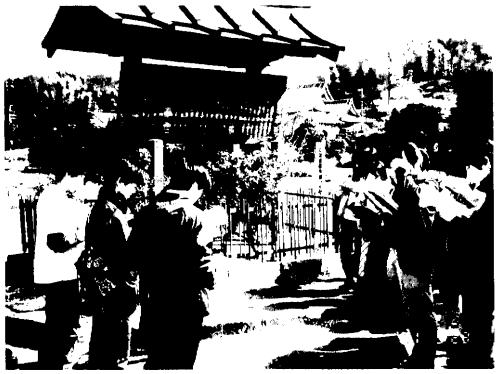
たという感想をもった生徒が少なくない。教室では味わえない、生きた古典の学習――古典を生んだ土地をおとずれ、自分の身体で感動すること――をという所期の目的は十分達成されたといえる。修学旅行とは異なり、小人数の希望者参加であることがもとにあり、生徒の意欲と教師の意気込みとが合致して、相乗効果をあげているためであろう。今後ともよりのぞましい古典教育を模索しつづけたい。

伝磐余池から二上山をのぞむ

甘橿丘にて

飛鳥寺から大原の里をのぞむ

飛鳥川にて



伝飛鳥板蓋宮跡にて

藤原宮跡から香具山をのぞむ

橘寺にて